

講演

『洞爺湖観光復活の鍵はどこにあるかー』 「Tohji&Okamiプロジェクト構想」の提案ー 大島直行（伊達市噴火湾文化研究所長）

6 月19日、洞爺湖文化センターで、第11回観光フォーラム（主催北海道大学観光学高等研究センター）が開かれました。その基調講演として行った大島直行伊達市噴火湾文化研究所所長の講演要旨を紹介します。

洞爺湖温泉は今

日本の観光は今、というところからお話しをさせていただきます。

日本の温泉観光そのものが、何かを失っているのではないかといいことです。短絡的な言い方かもしれませんが、今日の私のテーマでもあります「湯治」と「女将」を失ってしまったのではないかと。

日本の温泉観光は、ある時から日本の温泉観光にもヨーロッパのシステムを導入しましたよね。ひとつは湯治場はいつのまにかリゾートという名前に変わ



り、旅館はホテルに、温泉はSPAに、女将は気付きますと男の人に代わってマネージャーという立場が変わっている。

地元の方には失礼かと思いますが、実は洞爺湖観光は、「洞爺湖と温泉」を失っているのではないかと思えます。私たちは知らず知らずのうちに、「温泉だけでは客は呼べない」という消極的な意識になってきているでしょうか。

積み重ねてきた洞爺湖の魅力

そこで幾つかの指摘をさせていただきます。自然の「文化」化。聞きなれない言葉ですが、「オシャレ」と言ってもいいかもしれません。私たちが気付いてないところで洞爺湖の魅力は着々と積み重なっています。洞爺湖という自然の中にきちんと

根を下ろしているものがあります。

その一つが中島の縄文遺跡であり、洞爺湖一周している道路です。それから58基の彫刻群。洞爺湖芸術館の特に2階のピエンナーレの彫刻群を展示している部屋からの眺望、砂澤ビッキの作品群。そういったものが知らず知らずのうちに洞爺湖の中に組み込まれ、新しい魅力になっているのではないのでしょうか。

逆転の発想

誤解を恐れず言いますが、ジオパークや縄文世界遺産は「敵か味方か」微妙な位置にあります。私たちはどうしても世界遺産だ、ジオパークだとすると、それだけでお客さんが来てくれると思いがちですが、発想は逆ではないかと思えます。

洞爺湖観光の中核をなす温泉に人を呼ぶ込むと、温泉に来てくれた人が北黄金貝塚や入江・

高砂貝塚、ジオパークにも足を運んでくれる、そう考えるべきだと思えます。縄文、ジオパークを主役にするのではなく、あくまで洞爺湖温泉の再建をはかることが大事だと思います。つまり今こそ原点にかえて洞爺湖温泉の「本質」を取り戻す必要があるのではないかといいことです。それはもちろん「湖と温泉」しかないはずですが。

日本の観光は、見る観光から学ぶ観光へとシフトしてきましたが、おそらく、更なる進化を遂げるように思います。それは、学ぶ観光から「考える観光」へのシフトです。こうした予測にたって、洞爺湖温泉の観光振興も、新たな戦略を立てるべきです。国内だけでなく、ヨーロッパなどからの誘客を視野に入れ、日本の伝統的な温泉文化である「湯治（Tohji）」や「女将（Okami）」を再考してみることが重要ではないでしょうか。

洞爺湖観光の未来

これからは、「ソーシャルネットワークの活用」が大事です。洞爺湖だけではなくこの温泉も体力はありません。だとしたら、コストのかからないリス

クの少ないソーシャルネットワークにいち早く取り組むべきだと思います。ソーシャルネットワークに精通して、フェイスブック・チャット・ブログなどを積極的に利用しながら「ホームページ」を作って発信していくことしかないと思います。

最後に、経営あるいは街づくりに対するイニシアチブもだんだん若い人にシフトされていくように思います。こういった若い人たちが集れる場として、ぜひ「洞爺湖サロン」といったものを作り、若手の異業種の人たちの交流の場にしていく欲しいと思います。ディスカッションの中からいろいろなアイデアやビジネスチャンスが生まれてくると思います。洞爺湖の再生は十分に可能です。

